飯島賢二の『恐縮ですが･･･一言コラム』

第 122 回　「キレる若者」～　最大の犠牲者である！

仕事も通学もせず､職業訓練も受けていない若者のことを｢**ニート**｣(Not in Employment, Education, or Training = NEET ）と呼ぶ。『労働経済白書』（2005 年度版）によると、全国に約 64 万人いるとされる。

働いてはいるが定職を持たず、パート、アルバイトに終始し、年金・税金といった社会貢献をほとんど果たさない連中を｢**フリーター**｣(Free + Arbeiter の造語）と呼んでいる。2003 年版の『国民生活白書』によると約 417 万人、同じ年の『労働経済白書』によれば約 209 万人いるとされている。(両白書のデータソースは同じ、総務省『労働力調査』であるが、大差の理由はフリーターの定義が違う）このフリーターの多くの部分が､｢やりたいことが見つからない｣という理由で、いつまでもフラフラしている若者達である。自分のことすら決断できない日本の若者、運動能力も学力も著しく低下してきた彼らは、自分の将来を何と心得ているのだろうか？

｢オレがやりたいのに、何が悪いんだ！｣とキレまくっている若者、我々の周辺でも、身近に見受けられる光景である。自分のやりたいことだけをやるといった､｢自由｣と｢わがまま｣の履き違い、人の意見を聞かず唖然とするような、無節操なエゴイズム、こんな考えであれば、どんな学歴であろうと、いかにブルジュアの息子であろうと、厳しい競合の現場であるビジネス社会に、適合できるはずがない。

｢忍耐｣｢我慢｣｢辛抱｣、あるいは**｢配慮｣｢心配り｣｢思いやり｣**、そして**｢考慮｣｢思慮｣｢決断｣**こんな言葉は彼らにとって｢死語｣になってしまったか？…こんな軟弱な｢馬鹿者｣を産んだのは、だれだ！　いやはや冷静に、こうなったしまった原因はどこにあるのだろうか？

小生、実は、彼ら若者は戦後日本の｢**最大の犠牲者**｣であると、自分も含め、深く反省している次第である。国の基盤を作り、将来を支える｢**教育**｣を、あまりにも蔑(ないがし)ろにしてきた｢大人達｣に責任があるのは、明確な事実である。

子供をペット化し異常な愛情癖を繰り返す母親、本来の親としての責任から極力逃げようとする無責任親父､学校教育は画一的標準化､フラット化の中で､先生はサラリーマン、彼ら子供達の顔を、正面から直視すべき人がいないまま、体だけは成長してしまった。｢知らない人とはしゃべっちゃダメよ｣…であるならば､社会的コミュニティは希薄になるに決まっている。若者だけが悪いのではない。若者だけを責める問題ではないのである。

将来の日本を担うべき若者のため、大人達は勇気ある決断をすべき時である。遅くはない、怖いこともない、｢そんな、関係ないよ｣と思うことが、この実情を生んだ。今、この立場の自分が、何ができるだろう…一人一人の大人達が、そう、考え始めることが、将来の日本の姿を変えていくことに繋(つな)がる筈である。